

# 檀家のいない寺、見性院が描く 寺院消滅時代の未来航海図

本誌編集発行人 小川寛大

埼玉県熊谷市は東京中心部から在来線に乗って約一時間の、人口二十万の町。市の北境を越えると、そこはもう群馬県という地理環境であり、東京へ通勤・通学する人々のベッドタウンとしては、いわば北限ぎりぎりに近いところだろう。そういう意味で、いたって地味な地方都市という印象を受ける感じもある

が、最近では真夏の気温が四十度近くにもなる「猛暑の町」としてマスコミにしばしば取り上げられることなどから、その名を知っている読者も多いのではないか。

さて、そんな熊谷市に、見性院といいう曹洞宗の寺院がある。門構えや伽藍の規模などからは、いたつて普通な、何か特殊な寺院であるように

も見えないところだが、曹洞宗、いや日本の仏教界全体の中での名を知らない関係者は最早「モグリ」のようにさえなりつつある寺なのである。

この寺の橋本英樹住職が二〇一四年に出版した『お寺の収支報告書』（祥伝社）という本がある。本に巻かれたオビには、「2012年6月、

檀家制度廃止！なぜ、現役住職が全部話すのか」という、なかなかセンセーショナルな宣伝文句がおどつている。

その文章の通り、見性院は現在、檀家を持たない。そして申し込みがあれば誰に対しても葬儀を執り行い、その場合のお布施は定額制となっている。また、見性院を中心とした「善友会」という宗派を問わない僧侶グループが形成されており、この会は全国からの求めに応じ、メンバーの僧侶を葬儀や法事の場に派遣するという事業も行っている。

二〇一五年十二月八日、まさに

「ツッダが悟りを開いたとされる成道会のその日に、インターネット大手

通販サイト「アマゾン」で「お坊さん便」というサービスの販売が開始されたことは記憶に新しい。その人

の寺檀関係を問わず、インターネット大会のその日に、インターネット大手

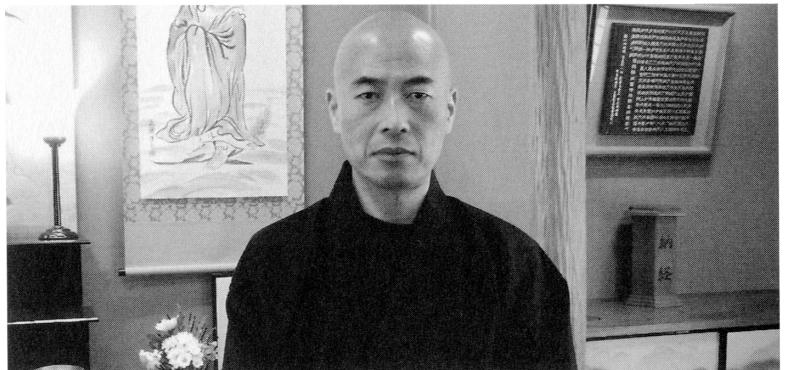
## あるいは常識的視点

ト上で申し込みを行えば、自宅などに僧侶が定額でやってくるサービスである。日本の主だった伝統仏教宗派でつくる公益財團法人全日本仏教会（全日本）は、こうしたサービスについて「疑問と失望を禁し得ません」とし、抗議声明を出すまでにいたっているが、まさに一般の伝統仏教寺院において、その住職自身が「定額制の葬儀」「僧侶の派遣」をやっている事実があるのである。

この見性院とはどのような寺なのか。橋本英樹住職とはどのような人物なのか。その素顔に接するべく、筆者は熊谷市に足を運んだ。

繰り返すが、見性院は檀家制の廃止や葬儀の定額化などで、仏教界の内外から多くの注目を集める「改革派」の寺である。しかしその寺を預かる橋本住職は、実に物静かな口調で語る穏やかな人で、ハッタリや自己顯示欲のようなものとは完全に無縁だった。

最近ではテレビ出演も多い橋本住職は、「記事執筆時の資料として使ってほしい」と、筆者に自身が出演したテレビ番組を録画したDVDを



2012年に檀家制を廃止した見性院の橋本英樹住職

仏が、半狂乱になつたかのような筆致の抗議文を出してくるような現状な

枚かくれたのだが、それを手渡す際に、「一般人なのに、こんなにテレビに出ちやつて……」とつぶやく様子が、筆者にはとても印象的だった。この言葉の中に、世間で言われる“見性院の改革”というものについて橋本住職がどう自己評価しているのかが、明確に現れているのではないかと、筆者は思った。つまり橋本住職は、自身を決して“特別な改革者”だとは思っていない。現在の日本の寺院が置かれた状況を、実に常識的な目線で見た結果として、当然するべき対策を行つている。ただそれだけのことなのではないのか。そういう風に、筆者には感じられたのである。

そして筆者が感じたそういう橋本住職の感覚は、現在の日本の仏教界が置かれた現状がどのようなものなのかを考えれば、まことにもつて正しい

のである。

「結局、もう“個の時代”なんですよ。その時代にどう対応していくのかが大事なわけであつてですね……」

見性院でのさまざま取り組み状況を説明しながら、橋本住職がふと漏らした言葉である。しかし多くの仏教界の住民たちは、こういう橋本住職のような“一般感覚”をぼほ持ち合わせておらず、まさに「南の島のリゾート地にでもいるような感じ」で漫然と日を過ごしているのだ。

## 檀家廃止で寺は伸びた

前述したように、埼玉県熊谷市はこれと言つて特徴があるわけでもない、ごく平凡な地方都市である。「これくらいの町で何かを変えるといふのが、一番難しいんですよ。大都会の中であれば、町自体の経済規

模や多くの人口を背景に、思い切ったチャレンジもできる。また、本当の田舎ならば、豊かな自然環境を武器にしたりと、開き直つて新しい試みを開発することもできる。こういふ人口二十万くらいの都市というのが、一番何をやつたらいいかという難しさがある。でも、こういう場所で新しい試みを成功させることができれば、それは全国のいろんなお寺のモデルケースになるとと思うんです」(橋本住職)

橋本住職が見性院の檀家制度を廃止したのは二〇一二年。それにともなつて、同院で執り行う葬儀に三十万円の定価(信士・信女号での戒名による葬儀の場合)を設定したといふのは、先に説明した通り。

しいとしか言いようのないものである。「檀家の上に乗つかつてさえいれば、そこから死人が出たとき自動的に葬式の依頼が来る。そうなると何十万円、場合によつては何百万円と呼ばれた集金システムは、この二十一世紀の現在、ガタガタになつてほとんど崩壊寸前である。

葬儀の場に僧侶を呼ばない「直葬」というスタイルは、現在、特に都市部では珍しくもない葬送のあり方となつてゐる。書店などに行けば、そこには「いかに安く葬儀をしますか」といったタイトルの“指南書”がズラズラと並ぶ。こうした流れは、個人主義の浸透や、長引く不況による日本人の可処分所得の減少といった事実に後押しされて出てきたもので、この状況が旧に復する可能性はどう思つていい。

しかるに仏教界はどうか。前述のように、「僧侶の派遣を定額で行います」といった葬祭事業者が現れただけで、日本仏教界の“元締め組織”的なビジネスの世界では、若い起業家たちがITなどを武器に新しい商売の世界を切り開こうとしているのである。そしてそんな光景を、多くの日本人は最早なんら特殊なものだとは思つていい。

ほんんどゼロだと言つていい。そのようなことは、何も葬儀や寺院の世界に限つた現象ではなくない。よく「シャツァー街化が進む地方の駅前商店街」といった報道があるように、現在の日本では多くの“旧来型のビジネス”が行き詰まるとしている。それは一般的な社会常識と経済感覚があれば、誰にも分かることであつて、それゆえに一般的なビジネスの世界では、若い起業家たちがITなどを武器に新しい商売の世界を切り開こうとしているのである。そしてそんな光景を、多くの日本人は最早なんら特殊なものだとは思つていい。

ほんんどゼロだと言つていい。

革を実行したのですか?」という質問が投げられている。橋本住職はそれに対し、「もう檀家制度に頼つてお寺を運営していくことは無理です」「現代社会ではきちんととした定価の明示がないサービスは受け入れられない」といった、実に“常識的な回答を寄せ、それらの記事や番組は「これぞ先進的な改革派寺院!」といった論調で締める。

ただ橋本住職の著書や見性院のホームページなどをじっくり読み込み、その上で橋本住職ときちんと話し合ってみれば、そもそもこの人に「なぜ改革を?」と聞くのは、と

んでもない“愚問”であることが分かつてくる。繰り返すように、橋本住職は今の仏教界にあって常識的に自分の立ち位置を見定め、取るべき現実的対応を行っているに過ぎないのだ。自分があまりにも分不相応な

「南の島のリゾート地」にいることに気づき、現実的な生活に戻るためにさつさと自宅に戻っただけ、というのが、世に言われる“見性院の改革”というもののが本質なのではないか。見性院という寺を軸に、仏教界に「なぜ」という問い合わせてみたのならば、やるべきはむしろ“そこの普通のお寺”に、「なぜあなたはこのご時勢、のんびりと檀家制度の上にあぐらをかいているのですか」と聞いてみるとことなのかもしない。そちらの方が、実は本質的なものが見えてくるような気が筆者にはする。

二〇一二年に橋本住職が檀家制の廃止を宣言したとき、旧来の檀家の中からは「寺をつぶす気か!」という反発もあがつたという。ただそれ以降、現在までに見性院で新たに墓地を求めた人は約百五十人、永代供

けたり、よく分からぬ多額のお金を持たれるというイメージが厳然とあるんです。檀家制を廃止し、お布施の定価を明示したことで、そういう抵抗感がなくなり、さまざま人がやってきてくれるお寺になつたと

「檀家さん」というのも、現在では心から仏教を信仰して、そのお寺の護持に関わっているという人は少数派

でじょう。特に信仰もないのに、『そういう家柄だったから』みたいな態度でお寺に接触されても、結局お互

い不幸なんですよ。やがては自分のエゴから、勝手な要求をお寺にするような人も現れてくる。そういう現実を前にして、見性院は一度リセットをかけたわけです。それが檀家制度を廃止。宗教上の強制は何もいたしません。ただ、お寺は信仰を受け入れる用意は常にしています。その中で、よく自分とお寺の関係というもの

いうことなんですね」

だからと言つて見性院が、「極力宗教色を排した、無機質な墓地販売所」のようになつているのかといえば、そうではない。たとえば見性院の本堂には、「曹洞宗認可参禅道場」の看板がかかる。一般向けの坐禅会を開催している寺院について曹洞宗の教団本部である宗務庁が審査をし、一定以上の環境を整備していると認めた寺にだけ与えられる称号で、全国の曹洞宗約一万五千カ寺の中でも、そう多くの寺が持つてゐるわけではない看板である。見性院は毎週一度、一般に向けた坐禅会を開催しており、熊谷市ほどの規模の都市にある寺院にしては、かなり活発な開催状況であるといえる。

また、見性院では写経教室や写仏教室、「お袈裟を縫う会」など、宗教的な行事を結構熱心に行つてい

る。こうした状況から見るに、橋本住職は自分に課すものとしては、仏教の精神をかなり大切にしているよ

うに見える。ただ、それを寺に集まる人々には強制しない。そういうスタンスなのだろう。

「檀家さん」というのも、現在では心から仏教を信仰して、そのお寺の護持に関わっているという人は少数派でじょう。特に信仰もないのに、『そういう家柄だったから』みたいな態度でお寺に接触されても、結局お互い不幸なんですよ。やがては自分のエゴから、勝手な要求をお寺にするような人も現れてくる。そういう現実を前にして、見性院は一度リセットをかけたわけです。それが檀家制度を廃止。宗教上の強制は何もいたしません。ただ、お寺は信仰を受け入れる用意は常にしています。その中で、よく自分とお寺の関係というもの

を考えてみてほしいんですよ」(橋本住職)

このような態度は、むしろ宗教的に実に敬虔なものと言えるかもしれない。

## コンビニ化とHD化

このような見性院の活動を通じ、橋本住職が描く仏教界の未来図とはどのようなものなのだろう。

「コンビニ化とホールディングス化ですね」

字面だけで見れば、いささかドギリとさせられる答えが即、返ってきた。

「コンビニ化というのは、つまりお寺に来てくれる人のニーズに、何でも応じられる寺にしていくことです。坐禅会や写経教室はもちろん、たとえばもう見性院では、お

養には七百人の申し込みがあつたと

いう。

「もともとの檀家数は四百弱だつたのですが、何らかの形で見性院と関係を持つてくれる人の規模は、その一・五倍くらいになつた感じですね」

(橋本住職)

檀家制をなくした見性院に新たに集つた人々は、何を求めてやつてきたのだろうか。そんな問いに、橋本

住職はあつけらかんと答えた。

「いや、何の縛りもないからですよ。

各種のお布施だつて定価を明示していますし。とにかく世間には、下手にお寺に関わると宗教的な縛りを受

けたり、よく分からぬ多額のお金

をとられるというイメージが厳然とあるんです。檀家制を廃止し、お布

施の定価を明示したことで、そういう抵抗感がなくなり、さまざまの人

がやってきてくれるお寺になつたと

寺で墓石や仏壇も購入できます。外部の業者を通すことなく、直接です。ですから値段も抑えることができて、実際とても好評です。そういう意味で、「コンビニ化」が必要になつてくると思うのです」

もう一つのホールディングス化とは何か。

「もう今後、日本のある程度の割合のお寺が立ち行かなくなるのは避けられないと思うわけです。また、ある程度の規模があるお寺にしても、今より厳しくなるのは避けられない。ならばグループにまとまつて、厳しい時代の中で共にがんばつていけないかと考えるわけです。

ただそれは、現状で所属している一般寺院に何かをしてくれるわけでもない宗派組織とは、まるで違う形態です。たとえば北海道か九州にあるお寺が、経済的にもうどうしよう

ような表情を浮かべつつ、筆者に一枚の紙を差し出した。今年四月中旬に、曹洞宗教団の埼玉県第一宗務所の所長が、橋本住職に送ってきた手紙だつた。「宗務所」とは主に都道府県ごとに設置された曹洞宗教団の地方事務組織で、いわば県厅に該当し、その所長とは県知事のような存在である。

手紙の中でA所長は、曹洞宗教団は全日仏と同じように、「供養する心」を軽視し、檀信徒の信仰心を滅させる、アマゾン「お坊さん便」のような「僧侶手配サービス」を認めつもりはないとの断言。現在、定額制の葬儀や僧侶派遣を行つている見性院に、「これをやめない場合、教団への背反行為になる可能性があることを予めお伝えし、注意を喚起いたしたいと存じます」との警告を発している。

もなくなつたとする。でもそのお寺が見性院のさまざまな方針に賛同してくれるようなら、『見性院グループ』に入つてもらうんですよ。見性院としては、そのお寺の運営について最低限、面倒を見ます。ただその後、そのお寺は見性院の方針に基いて、北海道、九州でがんばつて信徒を集めほしい。そういう形でネットワークをつくり、たとえば全国への僧侶派遣といったことも柔軟に行えないかと思つています。いわば、封建主義とはまた違う形での本末制度のようものを形成していくのかと考へているんですよ」

現在、そのようなホールディングス、本末制のようなものではないが、見性院を中心とした僧侶有志の集い「善友会」という組織が結成されている。参加メンバーは超宗派で約五十人。寺院経営に関する勉強会

や法話会などを中心に活動しているが、この会を基盤にした僧侶派遣事業もすでに立ち上がつていて、「とにかく一力寺だけでやつていけるような時代は終わりを迎えつつあると思います。横の広がりをどうつかつていただけるか。そしてそうした有力なグループ同士で、健全な競争が起こつていくような形になればいいんですけどね」

## 宗務所の警言

ただ、筆者はそんな構想を語る橋本住職に率直に聞いた。筆者としては、橋本住職の構想に何ら違和感はない。ただ、それこそまだ「南の島のリゾート地」での夢から醒めない近隣の寺院などから、批判、横槍などはないのか、と。

橋本住職は少しだけウンザリした

「分かつてないんですよ、本当に。私の考えるこれからのお寺のあり方としてもう一つ、教団組織はある程度の距離を取つていかなればというのがあるんですが、本当にその必要性をあらためて痛感させられました」

繰り返すように、筆者が見性院に出向き、橋本住職に直接会つて抱いた感想とは、「この寺はきわめて常識的な考え方、態度に基いて運営されているのだな」というものだつた。

しかし全日仏や曹洞宗教団は、その「一般常識」のはるかに下の、実に低いレベルのところをグルグルと低空飛行し続けている。そんな印象を強く持つた、埼玉県第一宗務所からの手紙だつた。

見性院は最寄のJR熊谷駅まで車で十数分。徒歩では少し厳しい距離であり、筆者は帰路、熊谷駅へは夕

クシーを利用した。車中で運転手が、「お仕事ですか?」と、筆者のスーツ姿を見て言った。「ちょっとと物書きをしておりまして取材で……」と筆者が返すと、運転手はにこやかに笑いながら、「そりやあいい。いい記事書いてくださいよ。マスコミの人、いっぱい見性院には行きますからね。もう熊谷の名物ですよ。実際、和尚さんもがんばつてるから」と返した。

寺とは、そこに住む住職が「ここは寺だ」と言うから尊いのではない。仏教を求める人が、尊敬する僧侶の住む場所を敬意とともに訪れ、そこを寺と呼ぶから尊い場となるのだ。

近い将来、残るは見性院か、全日

仏・曹洞宗教団か。

おがわ・かんだい◎一九七九年、熊本県生まれ。早稲田大学政治経済学部卒業。宗教界雑誌『中外日報』記者を経て本誌編集発行人。